

「平成」が決まった日 「令和」の始まりに際して

■新編集講座 ウェブ版 第123号 2019/5/1

毎日新聞社 技術本部長（元・大阪本社編集制作センター室長） 三宅 直人

「平成」が昨日4月30日で幕を閉じ、今日5月1日から新しい元号の「令和」が始まりました。私が新聞社で元号の変更を経験するのはこれが2回目。今回は昭和天皇がお亡くなりになっての代替わりで、私は大阪本社整理部（現・編集制作センター）の若手編集者でした。当時の部内記録＝右欄参照＝を基に、当日の様子を振り返ります。

■ そろそろ決まる新元号

昭和天皇は、1989（昭和 64）年1月7日早朝にお亡くなりになりました。この日午前、大阪本社整理部は、宿直者や日勤者に緊急呼び出し組も加えた総動員態勢を編成。号外発行、夕刊3版（早版＝**図①**）制作と、緊迫した業務に臨みました＝**写真②**。

あっという間に昼過ぎです。3●版（2番目の版）締め切り時間（通常午後1時、この日は特別に同2時まで繰り下げ）が迫ってきました。そろそろ決まるはずの新元号を掲載できるかどうか、全員が胃の痛む思いをしています。以下、部内記録によると……。

■ こんな延長戦は二度とない

<13:33> 「元号選定の有識者会議が始まった」とテレビ。予定よりも遅れている。「降版時間（編集を終え印刷に回す時間）延長だ」。藤田（整理部部長代理）が発送部＝**右欄参照**＝に電話するが、何回かけても話し中。がまんできずに走る。「20分延長頼む」。「今日はしゃあないな」と発送部デスクの中西。部長の中野もうなずく。

<13:49>（有識者会議に続く）閣僚会議、首相官邸で始まる。

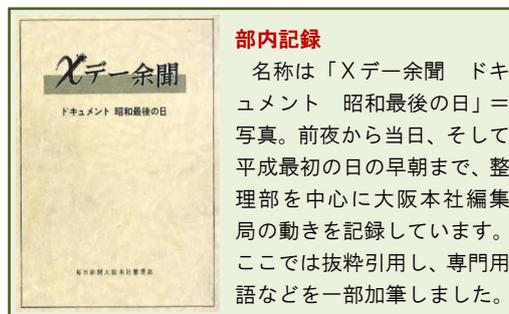
<14:02> 閣僚会議が長引いている。3●版は厳しい。藤田が再び発送部へ走る。降版時間14時40分まで延長決定。いつもより1時間40分も遅い。「こんな延長戦は二度とないだろう」。

■ 「決まった！」「待った！」

<14:07> 東京本社から専用線連絡＝**右欄参照**＝で「平成に決まった」。藤田の声が編集局に響く。「平和の平に成る。へ・い・せ・い」。直ちに「新元号は平成」の大見出しを出稿した。

<14:16> 3●版降版。次いで号外降版。テレビはまだ新元号を報じない。「おかしいな。特ダネかな」と藤田。

<14:20> 東京本社から「『平成』の印刷待った！ 正式発表まで待つ」との連絡。藤田が工程センターに「印刷ストップ」。



部内記録

名称は「Xデー余聞 ドキュメント 昭和最後の日」＝写真。前夜から当日、そして平成最初の日の早朝まで、整理部を中心に大阪本社編集局の動きを記録しています。ここでは抜粋引用し、専門用語などを一部加筆しました。



① 89年1月7日 毎日夕刊（大阪）1面3版
新元号「平成」は、まだ掲載されていません



（上）② 号外を手に、夕刊を編集する編集者
＝89年1月7日午前11時、大阪本社整理部で

発送部

新聞を印刷工場から販売店に運ぶ業務を統括する部門。締め切りを遅らせても最新ニュースを入れたい編集局と、配達時間を守りたい販売店の間で調整役を務めます。ふだんは編集作業が遅れると怖い顔でにらみますが、ここの時は販売店を説得するなど、頼りになる存在でした。

専用線連絡

東京、大阪、西部（北九州）、中部（名古屋）、北海道（札幌）の5本支社整理部を結ぶ専用電話があり、受話器を上げるだけで通話が可能。音声はスピーカーから流れ、周囲でも聞けます。通常の出稿予告はもちろん、緊急連絡にも重宝しました。

■ 記者会見に、どっと歓声

<14:35>テレビで、小渕恵三官房長官の記者会見が始まった。36分、「新元号は『平成』」。どっと歓声=写真③。37分、3●版印刷開始。新元号を伝える号外17万4000部発行。印刷局次長の入口と制作技術部の西村が整理部長席を訪れ、「平成への欄外切り替え=右欄参照=で、夕刊の終了後、CTS（新聞の電子組み版システム）を30分ほど止めたい」。学芸部長の佐倉は、「見出しにも『へいせい』ルビがほしいね。4版（夕刊の最終版）は、その線に=図④。

<14:40>4版の作業始まる。1面の新元号の記事が取り替えになり、扱いてもふくらむ。社会面にも「平成」の関連記事が入る。「年号の表記はどうするのか、読者から電話が入っている」と編集局次長の衣笠。「平成元年か、平成1年か」知りたいのだ。社会部デスクや校閲部員も聞いてくる。「元年です」と藤田。

<15:00>岡山印刷センターの町田社長（毎日新聞OB）が、自分で車を運転して瀬戸大橋を突っ走り、対岸の香川県へ刷り上がったばかりの号外を届けた——との報。毎日スピリットここにあり。

■ 戦中派の胸をよぎる思い

<15:26>4版降版終了。整理部長の桐生は、最後の「国民学校」（戦時中の小学校）1年生。本土決戦のために九州の山の分校に駐屯していた兵隊が「玉音放送」（昭和天皇が終戦を告げたラジオ放送）を聞いて嗚咽（おえつ）していたのを覚えている。社会面デスクの吉田は、自分が付けた「思いはめぐる『昭和』」の見出し載った紙面をみながら、「考え抜いた末に付けたものだ。子供のころ、必死で駆けこんだ防空壕（ごう）の土のおいも混じっている」。終戦の1か月前にビルマ戦線で父をなくしたデスクの野村は、母一人、子一人の自分史を重ね合わせながら、紙面に目を通して。胸をよぎるのは、遠き日のうずく思い。「終戦がもう少し早かったら」。野村は1942（昭和17）年1月生まれである。

■ スクープになった新元号

<15:30>デザイン係に「カットやイラストの『昭和』を『平成』に変えてほしい」との注文がきた。増井が平成の初仕事にかかった。それを見ながら囑託の島津は、新しい天皇陛下と同じ55歳。「こっちは定年（当時は55歳）。あっちはこれから。大変やるな」
<17:10>編集局長の上妻が部長席に来て、「年号はスクープになった。1版は抜いている（一つ早い版から入っている）」という。「官房長官が発表した瞬間に印刷にゴーをかけたのがよかった」。号外=写真⑤=も、本社はセット地域（夕刊を発行する近畿地区）だけでなく、統合（中四国など夕刊のない地域）にも配られている。



この後の朝刊作業で、やっと私の「出番」が。それはまた後日。



(上) ③新元号を発表する小渕官房長官
=89年1月7日、首相官邸で

1989年(昭和64年) 1月7日 (土曜日)

欄外切り替え

新聞紙面の最上部（記事掲載部の外にあるので「欄外」と呼びます）には、元号入りで日付が記載されています。89年1月7日夕刊は「昭和」ですが=図④、翌8日朝刊は「平成」に変わりました=図⑤。日付表示はコンピューターで自動制御しているので、この切り替え作業に時間が必要でした。

1989年(平成元年) 1月8日 (日曜日)



(上) ④ 89年1月7日

毎日夕刊（大阪）1面4版

新元号「平成」が入り、ルビも付いています



⑤ 新元号「平成」を伝える毎日新聞号外
=89年1月7日、大阪市内で